『ライ麦畑でつかまえて』における英語（その六）
—方言的用法 'like as if' について—

杉　浦　銀　策

読者は『ライ麦畑でつかまえて』を読みながら、一瞬おやと思う。'like as if' というあまり見慣れない接続詞句が出くわすからである。

> She came over to me, with this funny look on her face, like as if she didn't believe me.（124; 96）
> 彼女はぼくの言うことが信じられないていうような変な表情を浮かべて、そばへやって来た。

この 'like as if' が『ライ麦』に登場する回数は、延べ七回である。ホールデン愛用の成句というべきか。

まずこの接続詞句が辞書でどのように扱われているか、気になるところである。『リーダーズ英和辞典』や『ジーニアス・英和大辞典』（2001）は取り上げておらず、研究社『英和大辞典』には次のような記載がある。

> like as（if）《古・方言》あたかも ... のごとく（just as）: *like as* a father pitieth his children 父がその子を哀れむごとく（*Ps.* 103: 13）

また『ランダムハウス英和大辞典』第二版は、'like' の項目に次のように記載している。

> like as if...《古》《方言》ちょうど ... のように: She gave a queer look ～ *as if* she didn't believe me. まるで私の言うことが信じられないかのように変な目つきをした。

『ウェブスター』第三版を覗いてみると、次のようになっている。

like as *conj. chiefly dial*: in the way or manner that: AS〈*like as* a father pitieth his children, so the Lord pitieth them—Ps. 103:13（AV）〉...—now usu, used with *if*〈it was...*like as* if the films suddenly come real—Richard Llewellyn〉

Richard Llewellyn（1907?-83）はウェールズ大衆小説家である。なぜ『ウェブスター』はアメリカの作家から引用しないのだろうか。要するにそれは、'like as if' がアメリカ固有の方言的言い方ではないからである。またアメリカ固有のスラングでもないから、*HDAS* もこれを取り扱ってはいない。だがそのためにわれわれは残念ながら、この接続詞句がアメリカでどのように使用されてきたのか、という歴史的データに接することができない。そこで *OED* の記載について検討してみることにする。

OED の 'if' の項を引くと、'like as if' について次のような例を挙げている。

1535 Coverdale Prov. vii. 23 Like as yf a byrd haisted to the snare.　小鳥が罠に急ぐかのごとく。

また、'like' の項では以下のような説明と用例が載せられている。

Like as a. Introducing a clause: In the same way as, even as;（just）as if. Also *like as if*（now somewhat *rare*, occas. *like as and*）.
1523 Fitzherr. *Surv*, xiii,（1539）31 Lyke as and it were extortion. あたかもそれが金銭の強要であるかのように。（and=if）

1609 Hotland Amm. Marcell. 53 Hee came to Augustudunum aforesaid: like as if he had beene a leader of long continuance. 彼は前述のアウグストドゥヌムにやってきた。あたかも長年にわたって指導者であったかのごとくに。
1799 Coleridge *Lett.*（1895）272, I held the letter in my hand like as if I was stupid. 私はまるで間が抜けたかのようにその手紙を手にしていた。

'like as if' がコールリッジの書簡集に見られるとすれば、この句は当時口語的表現ではあっても、必ずしも方言的用法とは見做されていなかったということであろうか。しかしエドマンド・スペンサーの『神仙女王』やシェイクスピ

アの諸作品では、'like as if' ではなく、'like as' や 'as' がもっぱら使用されているところを見ると、'like as if' は十六世紀後半から十七世紀にかけてすでに方言化されていたのかもしれない。とにかく次のジョージ･エリオットの『サイラス・マーナー』（1861）や R. L. スティーヴンソンの『宝島』（1883）等になると、完全に農民の方言ないしは海賊の俗語となっている。

> "The door was open, and it walked in over the snow, like as if it had been a little starved robin."— *Silas Marner* [1]
> 「戸口が開いていて、まるで飢えた駒鳥のように雪の上を歩いて入ってきたのさ」

> "He gave it to me to Savannah, when he lay a-dying, like as if I was to now, you see."— *Treasure Island* [2]
> 「あの人はそれをサヴァナでそれをくれたんじゃ。あの時わしが今こうして死にかけているの同じく、あの人も死にかけておったんじゃ」

ただこの『宝島』からの引用における 'like as if' については、ここに挙げるべきではないのかもしれない。というのも、市河三喜博士が「like as if 今は 'like' なしに as if と云うが普通」[3] と注をつけているものの、'like as if'=as if という具合に考えると、文章の意味が通らなくなるからだ。むしろここでは'like as if'=like as=just as=in the way or manner that と解釈する必要があると思う。とにかくエリオットの『サイラス　マーナー』では農民の方言として頻繁に登場する。同時に正統的な 'as if' も併用されていることも忘れてはならない。

なお市河博士の『英文法研究』では、同じ 'like as if' について次のような説明をし、ディケンズの作品からの例を挙げている。

> "like as" や "like as if" を接続詞として "as if" の義に使ふ事は古い用法であるが俗語に残って居る。又、"like" 丈を接続詞として "as" を用ふる事も俗語であるが今日は大分colloquialの領分を犯しつつあるやうである。
>
> She holds him round the neck, like as if she was protecting him.— *Our Mutual Friend* [4]

次にイギリスの有名な方言辞典であるJeseph Wright, *The English Dialect Dictionary*（1923）を覗いてみると、'like' の項に次のような用例が見られる。

> Nhb. Richardson Borderer's *Table-bk.*（1846）VI.256. n.Yks. e.Yks. He weent about job like as if he didn't care about it. Ah mind it like-as-agif it was nobbut yistherday. あいつはそんな事どうでもいいってぐあいな仕事ぶりだったな。おらあそれをほんの昨日のことのように覚えてらあ。

さてイギリスにおける 'like as if' にまつわる歴史的状況は以上のごとくであるが、アメリカではどうなっているだろうか。*A Mark Twain Lexicon* には、マーク・トウェインの短編「ハドリバーグを墜落させた男」（1899）からの次のような用例が引かれてある。

> "Goodson looked him over, like as if he was hunting for a place on him that he could despise the most, then he says, 'So you are the Committe of Inquiry, are you?" [5]
>
> 「グッドサンは、相手のいちばんよく軽蔑できる箇所を探しているかのようにじろじろ眺め、それから言った—『それじゃ、あんたは調査委員というわけですかい？』」

これはEdward Richardsという年老いた銀行の支配人（cashier）が妻に語っている際の言葉である。舞台となっているHadleyburgは、'reckon'（=think）という語がさかんに使われているところからしてアメリカ南西部あたりの田舎町であろう。したがってここでの 'like as if' は明らかに方言的言い方である。しかしこの接続詞句は物語の中ではたった一回しか登場しない。妻の方は普通の 'as if' を使用する。

> "That 'one thing,' indeed! As if that 'one thing'wasn't enough, all by itself." [6]
> 「あの〈一事〉ですって。なんということ！まるであの〈一事〉だけでは十分でないみたいな言い方をするのね」

アメリカ小説でつぎに 'like as if' が見られるのは、マージョリー・ローリン

グズの『子鹿物語』（1938）である。

> "But you told it to the Forresters like as if we were mighty boldhearted." [7]
> 「でもお父さんはフォレスターさん一家の人たちに向かって、ぼくたちが怖いもの知らずみたいなことを言いましたよね」

> "You come too late. I'd of fotched you, if there'd been time. There wasn't time to fotch ol' Doc. One minute he was breathin'. The next minute he jest wa'n't. Like as if you blowed out a candle." [8]
> 「もう遅すぎたよ。時間があれば、迎えに行ったんだけど。医者を連れてくる時間もなかったんだ。今息をしてたと思っていたら、次の瞬間にはもう止まっていた。ロウソクを吹き消したみたいに」

これら二つの用例のうち、前者は主人公のJodyが自分の父親に向かって言う言葉である。後者はフォレスター家の少年Buckの言葉。双方とも少年の言葉で、もしかしたら 'like as if' は少年たちに愛用されていたのかもしれない。

ところで、アメリカ英語の方言辞典である *ADD* で 'as if; as though' を意味する 'like' を引いてみると、1902年にイリノイ州南部でこの 'like' が使用されていることが分かるが、同時にわざわざ 'Never "like as if" & "like as though" but simply like' と断っている。これで見ると、アメリカ英語の方言には 'like as though' という言い方すら存在し得たということになるのだが、しかしこの辞典はイリノイ州南部ではもっぱら 'like' のみが使用されるといって、'like as if' の用例はまったく挙げていない。

いったい十九世紀後半から二十世紀前半にかけて、アメリカで 'like as if' がどれくらいの頻度で使用されていたのだろうか。目下のところ私はまさに五里霧中というところだ。この接続詞句が登場する『小鹿物語』は 1938 年に出た作品であるが、物語の舞台は 19 世紀半ば過ぎのフロリダ半島の中部山間部。1896年に首都ワシントンで生まれた作者ローリングズは1928年からその土地に移り住み、その土地で聞いた方言の再現を試みたのである。まさに 'like as if' はアメリカの典型的な方言の一つであるといえる。

他方、サウス･カロライナ州の辺境地方を舞台にして幾多のロマンス小説を書いたウィリアム・ギルモア・シムズ（1806-70）の作品には 'like as if' は見られないようである。もっともシムズの作品については、あまり読んでいないの

で確かなことは言えないのだが、とにかく彼の創った登場人物は 'jest as if' を使う。

> "She walked and talked with him jest as if they had been brother and sister,...." [9]
> 「彼女はまるで兄妹でもあるかのように彼と一緒に歩き、語り合った」

> "And then she was so easy in her motion, so graceful, and walked, or sate, or danced, — jest, for all the world, as if she was born only to do the particular thing she was doing." [10]
> 「それから彼女は非常にくつろいだ優美な身のこなしで歩いたり、座ったり、踊ったりで—それはもうどう見たってまさにそういうことをするために生まれてきたような感じだった」

私は深南部作家のフォークナーやカリフォルニア作家のスタインベックの作品の中で 'like as if' に出合った記憶はないのだが、元来人間の記憶というのはあまり当てにならないものだ。ただ少なくともトウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』には一度も登場しないということだけは確かである。

接続詞 'like'（=as if）は昔から英米ともによく使用されてきたことは常識になっているが、『ハック・フィン』では全編がハックの言葉で語られているにもかかわらず、'like' の他に 'as if' も何度か出てくる。しかし今述べたように 'like as if' はまったく登場しない。その代わりに 'same as if' が一度だけ出てくる。

> Strange niggers would stand with their mouths open and look him over, same as if he was a wonder. — *Huck Finn*（II, 24）よそから来た黒ん坊たちは、口をポカンと開けて突っ立ち、まるで奇跡を起こすものでも見るみたいにジムをしげしげと眺めた。

つまりこうして 'same as if' = 'like as if' の図式が成立するわけであるが、*ADD* では 'same like'（=just like; just as）は取り上げているが、'same as if' への言及はない。そして私は 'same as if' という接続詞句もまたそう滅多にお目にかかる代物ではない—とかねがね思っていたところ、ふと *OEDS* における 'same' の副詞の項を眺めているうちに、『ハック・フィン』のこの用例が記載されていることに気づいた。しかし用例はこれだけで終わっている。古今の英米の文学

作品で 'same as if' という接続詞句が登場するのは『ハック・フィン』だけなのだろうか。これに答えてくれる英語史の学者がどこかにいるはずだが....。

さて『ライ麦畑』では「... であるかのように」を意味する接続詞句は、'like as if,' 'as if,', 'like' の三種類が登場する。'as though' の登場は一度もない。またそれぞれが使われる回数は、'like as if' が七回、'as if' が二回、'like' が四十二回。当然のことながら、'like' が断然多い。

ここで少々脱線気味になるが、この 'like' そのものについて少しばかり吟味してみる必要があるようだ。'as' や 'as if' を意味する 'like' がイギリス英語よりもアメリカ英語において圧倒的に多く見られる、ということはこれまでよく言われてきた。しかしそうかといってこれがアメリカ生まれの語法かというと、決してそうではない。本来はイギリス英語のものだ。

たとえば *OED* の 'like' の項を引いてみると、'As if', 'like as'. (obs.) Also (now *dial.*) *as like* という説明を行ったあと、次のような示唆的な用例を挙げている。

> 1493 *Festivall* (W. de W. 1514) 89 b. To..bere a candell brennynge in procession [on Candlemas Day] as lyke they wente bodely with our day. [聖燭祭の日に]あたかも聖母マリアと一体となって行くかのように、火を灯した蝋燭を携えて行列をつくること。

> *c* 1530 Ld. Berners *Arthur Lyt. Bryt.* 338 He was bygge and hye above all other, and coloured like the red rose had been set on the whyte lyly. 彼はほかの誰よりも身体が大きく背が高かったが、また赤い薔薇が白い百合の上に置かれたかのように華やかな服装をしていた。

というわけで、'as' や 'as if' を意味して節を後に従える 'like' は、'like as' ないしは 'as like' の 'as' が脱落して出来上がったものである。そしてその後も連綿として使用されてきたが、いつのまにか vulgar な用法として斥けられ、方言として生き残ってきたものらしい。とくに 'as if' の意味に用いられる 'like' については、*OED* ははっきりと obs. の烙印を押している。そしてやがて *OEDS* は〈廃語〉(obs.) の烙印を取り消し、以下のような英語の用例を記載することになる。

1860 in Bartlett *Dict. Amer.*（ed.3）244 The old fellow drank of the brandy like he was used to it. 彼のブランデーの飲みっぷりはいかにも慣れたふうだった。

1886 *Harper's Mag.* June 109/2 None of them act like they belonged to the hotel. 彼らのうち誰一人としてホテルの関係者のように振る舞うものはいない。

1895 J. Prior *Rennie* xvii. 191'E made a noise like'e were sorry or summat. 奴はなんだか申し訳なく思ったかのように騒ぎ立てた。

1898 H. S. Canfield *Maid of Frontier* 100, I sprung from the chair like a man had shot me through the head. 頭を撃ち抜かれたみたいに椅子から跳び上がった。

これら三つの用例のうち最初の二つはアメリカ、三番目はイギリスのものである。最後の例の作者については未詳であるが、題名からしてアメリカの作家？

しかしこうした接続詞として用いられる 'like' が依然として vulgar ないしは方言的な用法として見做されていたという事情は変わりなく、アメリカ英語の方言辞典 *ADD* は 'same like' と同じくもっぱら方言として扱っている。そして十九世紀初頭の用例から始めている。かくして尾上政次の『現代米語文法』におけるように、「Like の場合：like を as, as if の意味に用いるのは口語、俗語である」[11] というような説明がなされるようになる。

本稿においてこれまでたびたび登場してきた『アメリカの言語』の著者 H. L. メンケンは、リング・ラードナーの "The Busher's Honeymoon"（1914）[マイナーリーグ野球選手のハネムーン]に見られる俗語満載の文章を紹介している。そしてそこに出てくる 'like'（as）もまた 'every grammatical peculiarity of vulgar speech' の一つと見做している。[12] しかしメンケンが読者に伝えたかったことは、すでに日常生活において確立されてしまっている接続詞としての 'like' を非難する語学教師タイプの学者に対する反対勢力も早くから出現していたという事実についてであった。

ここで私にとって少々不思議に思えることが一つある。上記 *OEDS* に記載されてある用例の最後のもの（つまり H.S. Canfield の例）に示されるように、接続詞としての 'like' が相当に一般化していたはずなのに（『ハック・フィン』に見られるように方言としてはむろんのこと）、十九世紀から二十世紀への転換期の最も代表的な作品、ドライサーの『シスター・キャリー』（1900）には 'as', 'as if' の意味を表わす 'like' がまったく使われていないのはどうしたことだろう、ということである。この作品にはドイツ移民の少年（ただしペンシルヴァニア大学版のテキスト）やアイルランド移民の警官など多種多様な人物が登場するにもかかわらず、接続詞としての 'like' は使われない。キャリー・ミーバー、ドルーエ、ハーストウッド、エイムズといった主要人物が 'as if' を使用するのは理解できるとしても、ニューヨークのホームレスの人たち（all such homeless wayfarers）までも次のように 'as though' を使うのはどういうわけか。

"Cold, ain't it?"
"I'm glad winter's over."
"Looks as though it might rain" [13]
「寒いね」
「冬が終わってよかった」
「雨になりそうだな」

この問題についてはもう少し同時代の作品に目を通したうえで、改めて考えてみなければならない。

閑話休題

尾上政次氏の『現代米文法』は、ほとんど無数の現代アメリカ文学の作品からほとんど無数の引用がなされている、といった印象を与える特異な研究書であるが、なぜか 'like as if' についての言及はまったくない。つまりこれは、一般的な見方からすれば、'like as if' という接続詞句がアメリカの文学作品にほとんど登場しない稀な言い回しであることを示すものといってよいであろう。それなのに、『ライ麦畑』のホールデンはいかにも得意気にこれを頻繁に使って自らの語りを展開してゆく。しかもこの場合 'like as if', 'as if', 'like' という三種類の接続詞（句）は、それぞれの意味および使用状況の区別を明確にするこ

とが不可能である、ということにもわれわれは気づく。つまり完全に interchangeable であるということだ。

たとえば次の二つの例 a）, b）に見られるように、最初の例 a）ではその響きを重んじて 'like as if' を文頭にもってきたのかな、と思ったりするのだが、例 b）のように 'like' が文頭にくる場合もある。

a）Like as if all you ever did Pencey was play polo all the time.
（4;2）ペンシー校では年がら年中ポロだけをやってるみたいなんだ。

b）Like somebody'd just taken a leak on them. （259; 200）
誰かが階段におしっこをしたばかりといった感じなんだ。

それから次の例 a）に見られるように、英語の教師である Antolini 先生はさすがに 'like' を使わないで 'as if' を用いる。しかし例 b）に見られるようにホールデンも 'as if' を使う。（ただしこれは地の文で一回だけ）

a）"...at the age of thirty, you sit in some bar hating everybody who comes in looking as if he might have played football in college."（242; 186）
「きみが三十歳ぐらいになってどこかのバーに坐りこみ、大学時代にフットボールをやっていたような奴が入ってくると、誰彼なく憎悪をおぼえる....」

b）Most girls if you hold hands with them, their goddam hand *dies* on you, or else they think they have to keep moving their hand all the time, as if they were afraid they'd bore you or something.（103; 79）
大抵の女の子は、手を握り合うと、その手は死んだような感じになってしまうか、さもないとこちらを退屈させやしまいかと思ってみたいに、やたらと手を動かしていなきゃいけないと考える。

また次の例 a）, b）に見られるように、'like as if' および 'like' の前にコンマを置くという点においても両者に用法上の違いはない。

a）And the whole three of them kept looking all around the goddam room, like

as if they expected a flock of goddam movies stars to come in any minute.（95; 73）
三人とも部屋の中のあちこちをたえず見回しつづけていた。いまにも映画スターがわんさと押しかけてくるのではないかと期待しているみたいだった。

b）She had these orchids on, like she'd just been to a big party or something.（70; 54）
盛大なパーティへ行ってきたばかりといったように、蘭の花をつけていた。

これまで私は'like as if' について長々と歴史的な考察をしてきたが、どうも不思議でならないのは、この方言的接続詞句がなぜ突然、ニューヨークおよびその周辺の物語である『ライ麦畑』に侵入してきたのか、ということである。第二次世界大戦後のハイスクール･スラングが生き生きと伝えられているといわれる『ライ麦畑』ではあるが、果たして当時のハイスクールの生徒が本当に'like as if' を日常会話で頻繁に使用していたのであろうか。これはむしろ考えにくいことではなかろうか。そしてそれを証明するかのように、'like as if' は、『小鹿物語』の場合と異なって、『ライ麦畑』の登場人物の会話そのものの中で使用されることは一度もない。すべて地の文においてのみ登場する。ということはつまり 'like as if' はやはりホールデン少年の語りのレトリックの一つ、つまり特異な文学的修辞法としてのみ可能な語法なのではあるまいか—これが本稿の結論となる。

［注］

1 George Eliot, *Silas Marner*（研究社英文学叢書）大正十二年刊、152.
2 R.L. Stevenson, *Treasure Island*（市河三喜注釈）研究社・昭和二十年、19.
3 同書、263.
4 市河三喜『英文法研究』（研究社・昭和二十四年）、310.
5 Mark Twain, "The Man That corrupted Hadleyburg"（1899）in The *Complete Short Stories*（Bantam Classic, 1958）, 357.
6 *Ibid.*, 356
7 Marjorie Kinnan Rawlings, *The Yearling*（New York: Charles Scribner's Sons, 1938）, 72.
8 *Ibid.*, 202.
9 William Gilmore Simms, "The Two Camps" [from *The Wigwam and the Cabin*] in Arlin

Turner（ed.）, *Southern Stories*（Rinehart Editions, 1960）, 33.
10 *Ibid.* 39-40.
11 尾上政次『現代米文法』（研究社・昭和三十二年）、140-1.
12 H. L. Mencken, *The American Language*, 424.
13 Theodore Dreiser, *Sister Carrie*（The Pennsylvania Edition, 1981; 1998）, 467.